九分教のゲイヤについて

前田惠學

本誌前號において私は九分教の第一支 Sutta を取り上げ、その性格並びに具體的內容を論じた。本稿では次いでその第二支 Geyya を問題としたい。なほ近く刊行の「宮本博士還曆記念論文集」には、第八支 Vedalla (Vaipulya) に論及した。

一　ゲイヤの一般的語義と傳統的解釋

〔A〕 Geyya (Skt. Geya) は動詞 gāyati (√gai, to sing, recite) から作られた gerundive の名詞的用法である。從つて本來は「歌はるべきもの」「頌せらるべきもの」の意味で、漢譯の「應頌」はこれに當る。チベット譯 'Dbyaṅs-kyis bsñad-paḥi sde' もこの意味を表はしてゐる。(1) Geyya の語は名詞としてはインド一般に十分熟してゐない言葉らしく、(2) パーリ聖典中でも九分教に關聯する場合にのみこの語を用ひ、他の場合には餘り見られない。(3)

〔B〕 九分教の各支は、Sutta においても見られるやうに、(4) 夫々の一般的語義に對し九分教の一支としての特殊な意味を有するものが多い。このことは今 Geyya についても妥當する。九分教の一支としての Geyya の特殊な意味・性格は阿毘達磨・大乘の諸經論がこれを明らかにしてゐる。

先づ『大毘婆沙論』卷一二六には Geyya を以て「諸經ノ中依ニ前ニ散說契經文句一、後結爲レ頌而諷ニ誦之一」と說明し（大二七、六五九下）、『成實論』卷一には「以レ偈頌ニ修多羅ヲ」とし（大三二、二四四下）、『瑜伽師地論』卷八一(5)は「長行後宣ニ說スルナリ伽他ヲ」（大三〇、七五三上）、『顯揚聖教論』卷一二は「長行ノ後諷頌」（大三一、五三八中）、『順正理論』卷四四には「以ニ勝妙緝句言詞一、隨ニ述ニ讚スルナリ前契經所說ヲ」と規定してゐる（大二九、五九五上）。つまり Geyya とは法を簡潔に散文にまとめた Sutta を先づ說き、さらにその Sutta の內容を韻文の Gāthā を以て重ねて頌するものであると言ふのである。漢譯で Geyya を「重頌」と意譯するはこの意味を表はすわけである。

では何故ほぼ同一の內容を、前に既に散文の Sutta で述べつつ、而もさらに重ねて Gāthā を以て頌する必要があるのか。この點傳統的解釋は「義理を堅固」にし、「言辭を嚴飾」するためとか（『成實』）、「末了義經」を補釋するためとか（『瑜伽』『顯揚』『集論』『雜集論』）(6)說明してゐる。(7) 從つて結果的に見ると、Geyya には Sutta と Gāthā との間に單に重頌の關係しかないものと、重頌しつつ多少補足的說明の意味が加つてゐるものがあると言ひうる。しかし補足的說明の意味は必ずしも必要でなく、重頌の關係さへあれば Geyya とすることができる。

かくして Geyya の性格は次の三點に歸する。

（Ⅰ）先づ法を簡潔にまとめた散文の Sutta—即ち九分教でいふ Sutta が存在する。

（Ⅱ）次いでその Sutta を重頌する Gāthā が存在する。

（Ⅲ）Geyya は Sutta と Gāthā 兩要素の單なる複合體でなく、Gāthā が Sutta に對し重頌の關係にあるを要する。ここに Geyya が Sutta や Gāthā の何れとも異る特徴が存する。[8]（ただし、時として Gāthā が Sutta の補足的說明の意味を含む場合があるが、Geyya の本質的制約ではない。）

では Geyya の具體的內容は如何。傳統的解釋はこの點如何に說明し、近代の學者はこれに如何なる態度を示してゐるであらうか。

二　具體的內容に關する傳統的解釋と近代學者の立場

〔A〕Geyya の具體的內容に關する傳統的解釋には凡そ二種ある。[9]一は『婆沙』の釋、二は Buddhaghosa のそれである。先づ『婆沙』（前引箇所）は次の如き實例を示してゐる。

如下世尊告二苾芻衆一言。我說知見能盡二諸漏一、若無二知見一能盡レ漏者、無レ有二是處一。世尊散說、此文句已復結爲レ頌、而諷誦言。

有二知見一盡レ漏　無二知見一不レ然
達二蘊生滅一時　心解二脫煩惱一

また Buddhaghosa によれば「ゲイヤとはすべて偈のある經と知るべきである。特に『相應部』における有偈全體である。」[10]（Sabbam pi sagāthakain suttain geyyan ti veditabbain; visesena Sainyuttake sakalo pi Sagāthāvaggo.）

〔B〕右二釋の中、前者は既述の Geyya の分教義によりよく合するが、單に一例を擧げるのみで必ずしも Geyya の具體的內容に關する全體的概念を與へない。後者は分教義に合しない點があるが、具體的に說明して「有偈品」を古いとする近代の原典批判の結果とも一致を示す。故に「有偈品」を Geyya の主內容と見る立場が廣く行はれて來た。尤も學者の間には自ら傾向の相違もあり、Geyya の內容として「有偈品」しか考へない見方[11]と、「有偈品」を主としつつ他の類似經典をも含ましめる見方[12]とがある。しかし多かれ少かれ近代の諸先覺は Buddhaghosa の解釋を尊重され、「有偈品」を中心とされてゐるやうである。

これに對し美濃晃順師は獨り『婆沙』釋の正當性を主張された。師によれば、一般に Buddhaghosa の說は殆んど信ずるに足らず、今も「有偈品」(Sagātha-vagga) の名に應じ Geyya を「有偈經」(sagātha-suttā) と定義したもので、Buddhaghosa は Geyya を以て經中の偈と解したに過ぎないであらうと言ふ。[13]私見によるも、「有偈品」中 Geyya の名に値するものは甚だ少い。[14]而して美濃師が Buddhaghosa 釋を破し『婆沙』釋を立てられるについては首肯すべき點が多い。ただ師の說は傳統釋の正しい理解には大きな寄與をされたとはいへ、九分教の具體的內容の把捉には、なほ問題を殘された多少の遺憾があつたやうに思はれる。この點を考慮すれば、我々は『婆沙』の說明だけで滿足することはできず、さらに傳統的解釋の立場を越えて、原始佛教聖典自身に照し具體的內容を追求しなければならない。では如何なる視點を以て見れば、原始佛教聖典中より Geyya の內容となるものを取り出しうるであらうか。

三　ゲイヤの具體的內容決定の方法

〔A〕傳統的解釋によれば Geyya の本質は Sutta と Gāthā との間の重頌の關係にある。從つて Geyya の內容たるものは、この線を外れたものであつてはならないであらう。若し原始佛教聖典の

中からこの線によく適合するものを見出しうれば、傳統的解釋の上からもまた原始佛教聖典自身の上からも Geyya の具體的內容として適はしからう。ところで Sutta と Gāthā との間に重頌の關係があるかないかを知る最も客觀的にして手近かな方法は、或る經典において先づ散文が述べられ次いで偈文がある場合、兩者が如何なる關係を示す言葉で結合されてゐるかを調べることであらう。この觀點から聖典に當つて見ると、その結合文句は內容的に或る程度類別できる。今假りに名稱を附して說明しよう。

（Ⅰ）「單純說偈型」（單に某により偈が說かれた等とするもの。例、DN. I. 99: Brahmaṇā pi esā Ambaṭṭha Sanaṁkumāreṇa gāthā bhāsitā,〜; cf. DN. III. 97; MN. III. 153; 358; SN. I. 2; 3f. etc.）

（Ⅱ）「說法說示型」（次に偈を以て說法や說示をすると前置きする內容のもの。例、DN. II. 166: Doṇo brāhmaṇo te saṁghe gaṇe etad avoca,〜; DN. II. 255: Bhagavā etad avoca,〜 cf. DN. II. 275; III. 272; MN. I. 39; II. 64. etc.）

（Ⅲ）「內容指示型」（次の偈の主題・經名等を述べるもの。例、MN. III. 190:〜, bhaddekarattassa uddesañ ca vibhaṅgañ ca abhāsiṁ,〜; cf. DN. II. 49 285; III. 195; MN. III. 183. etc.）

（Ⅳ）「强意反覆型」（前揭の偈を强張すべく再說する結合の文句。例、DN. I. 99: Ahaṁ pi Ambaṭṭha evaṁ vadāmi,〜; cf. MN. I. 510 etc.）

（Ⅴ）「隨喜讚嘆・稱讚型」（弟子が佛の說法に對して隨喜の心を表白し、三寶を讚歎し、或は佛による嘉賞の言葉を述べるもの。例、MN. I. 508: Acchariyaṁ bho Gotama, abbhutaṁ bho Gotama, yāva subhāsitañ c' idaṁ bhotā Gotamena,〜; DN. II. 88: Bhagavā imāhi gāthāhi anumodi,〜; cf. DN. II. 36; 208; 265; MN. I. 262. etc.）

（Ⅵ）「會話・問答型」（偈による會話を導き、或は偈の問答の前に附せられた結合の文句。例、MN. I. 171: Evaṁ vutte ahaṁ bhikkhave Upakaṁ ajīvikaṁ gāthāhi ajjhabhāsiṁ,〜; DN. I. 223: Evañ ca kho eso bhikkhu pañho pucchitabbo,〜; cf. DN. II. 39; 241; 349; MN. I. 169; II. 99; 143; SN. I. 5; 8. etc.）

（Ⅶ）「ウダーナ型」（Ⅰ—Ⅵは何れも定型的表現を有しないが、ウダーナ型は表現が定型的で 'imaṁ udānaṁ udānesi' の句を有する。特に 'Atha' kho Bhagavā etaṁ viditvā, tāyaṁ velāyaṁ imaṁ udānaṁ udānesi,〜 の如き定文句は九分教 Udāna の Merkmal である。[15] 例、DN. II. 89; 107; 136; MN. I. 508; Ud. etc.）

（Ⅷ）「結合句省略型」（結合文句全くなく、散文部から直接偈文部に移行するもの。ただしこの場合にも他の何れかの型の文句を入れるとピッタリするものもある。例、DN. II. 128; 134f; 151; 153; 167; 206; ……; III. 204; MN. I. 328; 337; 386; III. 189; 191; 193; 202; SN. I. 1; 2. etc. etc.）

〔B〕 ｜應以上の如きが何れも我々の目的に沿はないのに對し、次に明瞭に Sutta と Gāthā とが重頌の關係にあることを示す型がある。言はば「重頌型」で、ウダーナ型と同樣よく整つた「キマリ文句」の形をとつてゐる。かつ重頌型は Geyya 型と Itivuttaka 型とに二大別されうる。

（a） 先づ Geyya 型は九分教 Geyya たることを示す特徵的形式と思はれるものである。つまり Sutta と Gāthā とをば 'Idaṁ

avoca Bhagavā, idaṁ vatvā(na) Sugato athāparaṁ etad avoca Satthā,〜（かく世尊は曰へり。善逝はかく曰ひ已って、大師はさらに［その意を］次の如く［偈にて］曰へり）といふキマリ文句で結合するものである。[16] これこそ Sutta と Gāthā とが重頌の關係にあり、從つて Geyya であることを示す Merkmal であらう。漢譯では譯語の不統一を免れないが、これに相當する結合文句を見出しうる。前掲『婆沙』の實例文中にある「世尊散說、此文句已復結爲頌、而諷誦言」の語もこれである。

なほこの Geyya 型の一變形とも見るべきものに 'Idam avoca Bhikkhave *Brahmā Sahampati*, idaṁ vatvā athāparaṁ etad avoca,〜（比丘らよ、娑婆主梵天はかく述べたり。かく語りてさらに［その意を］次に［偈にて］言へり）の型がある。[17] だが前者に比し遙かに頻出度が少い。のみならず、九分教は本來佛所說・如來所說をその建前とするから、梵天に歸せられる本形式は本來的な九分教の Geyya 型とは見做しえないと思ふ。

（b）次に Itivuttaka 型とは、パーリでは小部經典 Itivuttaka 及び DN. 30 Lakkhaṇa-sutta の二經にのみ見られる特殊の重頌型である。この二經には 'Etam-atthaṁ bhagavā avoca, tatthetaṁ [iti] vuccati,〜（この義を世尊は宣ひ、ここに次の如く［偈を］說き給ふ）の定型結合句がある。されば聖典 Itivuttaka は周知のやうに經首が 'Vuttaṁ hetaṁ bhagavatā vuttaṁ-arahatā ti me sutta(ṁ)' で始まり、經尾が '[i]ti' で終るといふ特徵を有するばかりでなく、本質的には重頌集乃至 Geyya 集でもある。[18]

ところで九分教の Geyya と Itivuttaka との關係を追求して見るに、Geyya 型が原始佛教聖典一般に廣く行きわたつてゐるのに對し、Itivuttaka 型が僅か二經にしか見られない點に留意すべきであらう。また Geyya が諸傳一致して九分教（乃至十二分教）の第二支といふ重要な位置に置かれるに對し、Itivuttaka（Skt. Ityuktaka 如是語）は第六支以下に配置され、しかもこれを Itivṛttaka（本事、過去物語）と解する有力な異傳まで存する。[19] これらの點から推定するに、Itivuttaka（Ityuktaka）は Geyya から別立されて九分教の一支として獨立したもので、もともと Geyya の一種或は一特殊形であるばかりではなく、恐らくその發達形と見るべきものと思はれる。因みにこのことはまた九分教（乃至十二分教）自身の中に新古の層があることを示唆するものでもある。[19]

四　結　論

以上の所論により、原始佛教聖典中から九分教 Geyya の具體的內容を抽出することは極めて容易となつたと思ふ。卽ち Geyya 型の 'Idam avoca Bhagavā, idaṁ vatvā(na) Sugato athāparaṁ etad avoca Satthā,〜 なる定型結合句に注目し、その前後に配置されてゐる一連の Sutta と Gāthā とを取り出せばよいわけである。重頌の關係を示し、九分教 Geyya の內容たりうる特徵を有する結合句は、少くもパーリ聖典について見る限り、これ以外に見出されないやうである。

尤も M. Winternitz はかかる型に屬する若干例を取り出し、結局この定型句は次の偈が挿入であることを示すものとしてゐる。[21] 勿論時として Geyya 型の定型句に結ばれてゐても、Sutta と Gāthā との內容が餘りに相違してゐて內容的には重頌の關係にあると認め難い場合もあらう。さうした場合兩要素の何れかが後の挿入であることもあらうし、別個に存在した兩要素を無理に結合して九分教の

Geyya としての形式を整へ、經典に佛所說・如來所說たる權威を與へようとしたこともあらう。從つて個々の場合については言語・內容等の面からなほ十分檢討する要がある。しかし大局的にはこの定型句は Winternitz の說のやうに挿入偈を示すものではなく、九分教の Geyya たることを示す Merkmal と見るべきであらう。ところでまた時として內容的に Sutta と Gāthā とが重頌の關係にありつつ、而も何らの結合句を有しないもの（「結合句省略型」の一種）がある。かかるものを Geyya に數へるべきか否かはなほ多少問題である。恐らく定型結合句を有するものに準じて Geyya の一部とすることも許されるのでないかと思ふが、しかし少くとも定型句を有するものが典型的・標準的と言へるであらう。

九分教は四部四阿含原形成立以前のものと考へられるが、ここにさうした古い時代の重要な經典形式の一つを明らかにし、原始佛教聖典の最古層を抽出する一つの注意すべき視點を獲得しえたことにならう。我々はこれによつて九分教 Sutta とほぼ同じ段階にある[22] Geyya の具體的內容に關する大凡の概念をうることができるやうになつたと思ふ。

1　榊博士『飜譯名義大集』一二六八。

2　美濃師「九分十二部經の研究（上）」（『佛教研究』第七卷第一・二合併號）七〇頁。

3　Pāli Text Society's Pali-Eng. Dic., s. v. Geyya.

4　『印度學佛教學研究』二ノ二、拙稿二七〇頁參照。

5　同じ『瑜伽論』卷二五には「於二中間一、或於二最後一、宣二說伽他一」とも說明し（大三〇、四一八中）、同種の解釋は『顯揚論』卷六（大三一、五〇八下）、『阿毘達磨集論』卷六（大三一、六八六中）、同『雜集論』卷一一（大三一、七四三下）にも見られる。

6　前註引用箇所參照。

7　定賓『四分律疏飾宗義記』卷三本には「此（＝Geyya）有二二相。一爲レ利二益後來之者一、應レ爲二重頌一。二者爲二長行義不了一故、應二更頌釋一」と述べ（『續藏』六六套一册五十丁右下）、基『大乘法苑義林章』卷二本も同樣趣旨の釋を施してゐる（大四五、二七六中下）。今併せて考慮すべきであらう。

8　美濃師、前引論文、六九頁、九二頁參照。

9　『大乘涅槃經』卷一五（大一二、四五一中）にもあるが、『婆沙』とほぼ同趣旨と見做しえよう。

10　『印度學佛教學研究』二ノ二、拙稿二七五頁、註4にその出典を擧げた。

11　宇井博士『印度哲學研究』第二、一五九頁。林屋博士『佛教研究、第一卷』七一七頁、等。

12　『荻原雲來文集』四〇四頁。赤沼教授『佛教經典史論』一七〇頁、等。

13　美濃師、前引論文、九四頁。

14　註16參照。

15　水野博士「ウダーナと法句」（『駒澤大學報』復刊第2號）三頁以下。

16.　この Geyya 型の結合句はパーリ聖典中次の如き箇所に見出される。卽ち DN. II. 90; 120. 123; 199; III. 181. 182（＝大一、七〇中）; 184（＝大一、七〇下）; 186（＝大一、七一中）187; 191（＝大一、七二上）; MN. I. 227; III. 187; 257; SN.

I. 69; 100; 102; 152; 189; 220; II. 241; III. 26（＝大二、大二一下）; 83; 85; 142; IV. 127, V. 6; 24; 217; 344; 400. 401; 402; 405; 432; 433; AN. I. 63; II. 1; III. 34; IV. 105; V. 173; Sn. pp. 78, 126, 140—148.

17 MN. I. 168; SN. I. 137; 140; AN. II. 21 等に見られるのみである。

18 パーリ聖典 Itivuttaka 中、經首の定型句を缺くものは、また例外なく重頌の關係を示す定型結合句を缺いてゐる。（＝Itiv. 81—88; 91—98; 101—111）

19 Itivuttaka については別に論ずる機會を持ちたい。

20 Geyya 以外にも、例へば Vedalla は Veyyākaraṇa の特殊形或は發達形であるといふやうな關係もある。

21 M. Winternitz: Geschichte der Ind. Lit. II. S. 27, Anm. 3.

22 Geyya の形式は Sutta, Gāthā の兩要素があつて始めて成立しうるものであるから、Geyya は Sutta, Gāthā よりも成立が後であると考へられるかも知れない。しかし佛教文學史の上だけから見る時は、Geyya はやはり九分教の中でも特に古い四つ或は五つの支（Aṅga）の中に入るべきものと見られる。ただし、インド文學史全體の立場からは自ら別の見方が生じうることであらう。

（本研究は昭和二十九年度文部省科學研究助成補助金による助成研究の一部である。）

大谷大學に於ける第四回學術大會に於いて研究發表をされながら、種々の事情により、原稿を寄せられなかつた諸氏及び題目は次の通りである。

二諦說の構造について　西　義雄
一乘と三乘　長尾雅人
佛・寺の字義　福井康順
般若燈論所引の外道學派名の一二について　野澤靜證
元代佛徒の免囚運動　野上俊靜
太子教學に於ける諸問題　成田貞觀
大鑑淸規研究序說　大石良雄
現實の問題　岩淵忠雄
法然淨土教に關して　中村良觀
歡異鈔の著者について　フィリップ・アイドマン